
G S 恋姫無双

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GS恋姫無双

【Nコード】

N8498Z

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

恋姫の新しい外史へ、よこつちがあられました。・・・ただし、もうひとり追加です。いや、一柱ですねw 乙女な三国志に紛れ込んだ彼らの活躍にご期待ください。

第一話（前書き）

えー、ありがちな作品を書き続けた神代印のよこっちものの新作です。

できてる分は一気に行きますんで、よろしくw

第一話

見渡す限りの荒野。

というか、全然見渡す限り何もない。

山とか遠くにあるけど、方向とか方位とかそういうものを見つけないのは全く役に立つ感じが無い。

「老師、これはどういうことですか？」

「むー、やっちゃったかのお？」

青年というには若い、紅いバンダナの男と、まるでサルのようないや、猿そのものの眼鏡をかけた老人が呆然と立っていた。

「老師、もう一度聞きますが・・・」

「なに、たぶん事故じゃな」

取り合えず、事故、という老人。

「それって、どういう類の事故ですか？」

「ふむ、転送事故じゃな」

ふう、と溜息を付いた後、男は輝く珠をかざして周囲を見回す。しばらくくるくる回った後で、男は老人を見た。

「まずいつすよ、まずいつすよ、まじで全く不明な場所じゃないっすか！」

「ふむ、長い人生じゃ。こういうこともあるじゃろ」

「あんたの超ロング人生と一緒にすんなや!!」

男の叫びは荒野を走る。

しかし誰も答えてくれない。

聞こえているはずの老人は馬耳東風。

取り合えず前を向かなくちゃ、と涙目の男であった。

妙神山での合宿が最盛期を迎えた所で、老師が面白いものを開発したので一緒に遊ぼうといい始めた。

体験型のRPGだということで、戦略や戦闘の経験稼ぎの足しになるはずだという話だった。

面白いかもしれないが、試すにや恐いかナーとかおもっていたんだけど、まあ時間もあるし、ということでテストプレイを試してみた。

してみたんだけど、なんつつか、こう、いきなりバグがあった。

展開されたのは仮想空間じゃなくて、転移陣だった。

瞬間発動したため、俺も老師も巻き込まれて荒野に飛ばされた。

飛ばされた当初は呆然としてただけど、腹は減るし睡眠も必要ということで早々に移動することにした。

半日ほどして到着したのが今暮らしている村で、相次ぐ盗賊の襲撃で男手が不足しているそうで、住み込みで農作業を手伝う代わりに食事を提供してもらっている。

「兄ちゃんといじちゃんが来てくれて助かってるよ!」

「兄様、御爺様、存分に召し上がってください」

幼い少女の姉妹かと思いきや、親友同士の典韋こと流琉と許緒と季衣の二人。

二人とも力は強いのだが農作業には向かないらしい。多分、気による強化をしているんだろうなあ。

「わしらこそ助かったぞ？ 流琉、季衣」

「ああ、ワイらを助けてくれたのは二人や。困ったことがあったら相談してや」

うんと頷く少女二人。

良い笑顔や。

二人の少女と共に二月ふたつきほど生活していた所で、近くの廃砦ごうに破落戸つきが集まっているという噂が流れてきた。

流琉、季衣の二人が偵察してきた所では、黄色い布を頭に巻いた男達が下品な笑い声を上げて、この村の襲撃をたくらんでいたというのだ。

「ふむ、役人に訴えてみるかの？」

「じいちゃん、そりや無駄だよ。あいつらにそんなこと教えたら、自分のも他人のも関係なく財産かき集めて逃げられちゃうのがオチだよ」

「そんなに頼りないんか？」

「というか、頼った計画をするだけ無駄です」

辛らつな二人の少女の言葉だったけど、真実なんだろうなあ、と思う。

「じゃ、もつと偉いやつは？」

「もつと早く逃げる」

なんつつか、共感出来そうな行動方針やなあ、と俺。

「ふむ、で、流琉、季衣。下郎は何人ほどじゃ？」

「んー、二十人ぐらい？」

「中で炊事している煙も上がってましたのでその倍以上はいると思います」

「なるほどのお・・・」

ぼんぽんと棍で肩を叩く老師を見て、全力でいやな予感がした。

「その程度なら、わしと横島で十分じゃな」

「「え!？」」

思わず目を見張る流琉と季衣。

「たしかにじいちゃんは無茶苦茶強そうだけど、兄ちゃんは・・・」

「何を言う。横島はわしの持った弟子の中で一番の弟子じゃぞ？」

「・・・へえ、じゃあ、にいちゃん、手合わせしてくれるう!？」

「ことわる!」

何が悲しゅうて、将来有望な美少女と戦にやなんのや。

美女美少女の味方、それがわいや。

「・・・にいちゃん・・・」

な、泣くな泣くな泣くな！
解ったから泣くな~~~~~

「やった~~~~~！」

あかん、泣いとらんかった。
やられた。

第一話（後書き）

よこっちは、なぜかロリに引つかる。

これはよこっちものの宿命か？w

第二話

御爺様の言葉は伊達じゃなかった。
季衣の鉄球がカスリもしない。
その上、

「あかん、引き戻しに時間を掛けすぎや」
「同じところにおったら、囲まれるで」
「よしや、その動きや」
「あかんあかん、その場所はだめや」

優しく教えるように季衣の戦い方を正してゆく。
最初はイライラしていた季衣も、いまでは遊んでもらっている子
犬のように目を輝かせて兄様に鉄球を向けている。

やってることは殺伐としてるんだけど、局部的には何とも。

はあ、これじゃあ付いていくって計画が丸つぶれ。

「どうじゃ、横島の実力が低いなら、警護目的で着いてく計画が丸
つぶれじゃろ？」

「御爺様、ご存知でしたか？」

「まあな。これでも年だけは重ねておるからのお」

軽く笑う御爺様。

孫赤空そん・せきくうという名のお爺様は、真名を「悟空」とおっしゃいます。
まるで神仙のようですねというと、面白そうにお笑いになられます。

「ですが、二人だけというのは・・・」

「実はのお、わしの「武」は酷くての。そなたらに嫌われたくないのじゃよ」

優しい二人の「武」は、人前で使うと嫌悪感をもたれるから見せたくないとおっしゃる御爺様。

でも、私たちは知っている。

お二人がどれだけ優しく、どれだけすばらしい人たちかを。

折角俺が季衣に勝ったのに、老師が流琉に負けた。
そんなわけで、仕方なく破落戸退治にこうとすると、村の有志も立ち上がる。

まいった、この村の連中は気持ち良いから、こういう展開になると思つてたんだよなあ。

でも、みんなの意志も固いので、仕方なく、本当に仕方なく集団を組んで攻め込むことにした。

つつかさ、老師一人いりや、話がすむんだがなあ。

「そうなんですか？ 兄様」

「ああ、老師が本気になれば、勝てる人間なんかおらんぞ？」

「ふわあ、じゃあ、兄ちゃんより強いのか？」

「せやせや。俺が百人いてもかなわんな」
「へえ……」

未だ武力が格好良い世界の少女たちなので、その強さへの憧憬は絶えることがない。

季衣は俺にかなわなかったことで一気に評価を上方修正したし、その師匠である老師には更なる上方修正評価をしていた。

で、そんな強い人たちが率いているのだから、言うことで村人の士気も高い。

なんつつか、本気で時代物のゲームを体感してる気になってきた。信長の野望とか、円卓の騎士団とか、三国志とか……。

「……ん、三国志？」

「どしたの、兄ちゃん」

「いやいや、なんでもない」

……やべ、急に色々と繋がったぞ。

黄色い布の破落戸＞黄巾

季衣＞許緒＞曹操の武将

流琉＞典韋＞同じく

……まさかなあ……。

妙神山ですべてだったシュミレーションゲームを思い出してしまった。

パピには不評だったけど、小竜姫様と戦略を練りながら遊ぶのは結構おもしろかったのを覚えている。

そう、イヤなぐらいに覚えている。

「まさかなあ・・・」

「横島、声を出すな。そろそろつくぞ」

その声を聞き、周辺も声を止めた。

目指す砦が視界に収まったから。

それは流れるような体術だった。

兄ちゃんと同じ兄ちゃんが先頭になって、砦に攻め込んだんだけど、すぐに門が閉められた。

閉められたのにじいちゃんが棍を叩きつけると、門が吹っ飛んだ。

「・・・」

誰もが、村人も破落戸もみんな呆然としてる。

そんななか、兄ちゃんが武器も持たず躍り出て、そこら中の破落戸を殴りとばして気絶させていった。

「よし、気絶した奴ら方縛り上げてくれ」

「「「「わ、わかった！」「」「」」」」

にいちちゃんといい、じいちゃんといい、どんだけの修行したらあんな「武」を修められるんだろう？

でも、にいちちゃんやじいちゃんに習っていれば、いつかたどり着くかな？

「横島！ やれ！！」

「うっす！」

じいちゃんのかげ声と共に兄ちゃんが砦の壁を飛び上がって越えた。

つつか、兄ちゃん、何者？

ドカンとかバキとかカキンとかいろんな音はしたけれど、血の臭いは一切しない乱闘音の後、にこやかに手を振って兄ちゃんが出てきた。

「つつわけで、中には50人ほどいるから。全員縛り上げよう」

「「「「「おおおおお！」「」「」「」

まるで幻みたいな二人の活躍で、黄色い奴らは全員取り押さえられた。

・・・やっぱ兄ちゃん、すごい！

第三話

なんつつか、砦から戻ると季衣がまるで猫のようにすり寄ってくる。

二言目には「手合わせしようよ」と潤んだ瞳で見てるんだ。

・・・くそあ、わいはロリやないんや。
揺るがんぞあ。

とはいえ、こう、甘い香りを出してすり寄ってこられると、どうも、なんつつか、やばい。

この村には辛抱たまらん美女が居ないだけに、この誘いには参ってる。

「横島、10や20の年齢差など、大したことないぞ？」
「だから、あんたの超々長い人生の視点で見るなや！」

あぶねえんだってばよ、ほんとに！！

付け加えるなら流琉もやばい。

こう、なんつつか、視線とか態度とかが危険な気がする。
そう、黒くなる前のおキ又ちゃんみたいなかんじで。

つまり、「シメサバ丸」一歩手前つうことが。

やばいやばい。

冷や汗いっぱい俺たちの生活は、再び脅かされることになったのだが、破落戸の襲撃に感謝することになるとは思わなかった。

聞けば、化け物みたいな奴らが居るという。

一人はまるで猿のような老人だが、武は化け物。

もう一人は見た目はふつうだが、動きが化け物。

そんな二人の化け物に守られた村があるというのだ。

その村人に襲撃された集団は全員捕まったのだが、賄賂一つで釈放された。

この世の中は、実に俺たち向きだ。

「か、かしら、やっぱりやめましょうや」

「そうでさあ、あそこには化け物二匹がいるんでさあ・・・」

「も、も、もう、会いたくないんだな」

解放された奴ら全員がビビっていた。

というか故郷に帰って重税でも農民やってたほうがよかったと本気で青くなっている。

「てめーら、『しすたーず』に会えなかった方がいってのかあ！
？」

瞬間、ビビってた奴らの氣勢が上がったが、それは一瞬で、すぐに低下してしまった。

いかに恐ろしい目にあつたのやら、と悩んでしまう。

一応、本隊へ戻して「しすたーず」を一度見た方がいいかもしれない。

そんな判断をしているところで、正面の村から砂塵をあげる存在が現れた。

「だれか！」

「はっ！」

「あれはなにか!？」

遠見役が声を上げる前に、一部が声を上げた。

「ば、化け物だ・・・」

「なに？」

振り向けば、何人もの同士が真っ青になつて逃げ支度をしていた。

「かしら、正直に言います。生き残りたかったら、あいつら化け物に正面から向き合わず逃げることを提案するっす!!」

提案が通らなくても逃げる、どこまでも逃げる、故郷まで逃げる、飢饉でも逃げる、全力疾走で夜も徹して逃げる!!

そんな叫びをあげて逃げた男の後を、数十人が追った。

その姿を啞然と見ていた男たちは、苦笑いで向き直った。

現れたのは二人。

百人からの攻撃で囲い込めば、どんな将だって歩兵に殺されると

いうものだ。

そして俺たちは千人。
負ける道理がない。

「たった二人だ、押しつぶせ！」

「「「「「おおおお！！！！」」」」」

槍や剣を構えた男たちが砂塵に向かって踊りかかり……

……なぜか宙に吹っ飛んでゆくのが見えた。

「……え？」

俺を口リ地獄から救ってくれた破落戸に感謝を込めて踊りかかる。
右手は霊波刀、左手にはサイキックソーサー。

相手の剣を槍を受け止めている間に、老師がふつとばすという連携で、すでに百人単位を空の星へと変えていた。

さすがに即死レベルの攻撃をすると後始末が大変なので、とりあえず死ななくて怖くて二度と逆らう気にならない程度に痛めつけることを重点にしてたら、半分ぐらいのところで逃走開始。

もちろん追撃戦を実行して、さらにその半分を散らした。

「いやー老師、すごいっすね、奇跡っすよ」

「そうじゃろ？ わしも驚いてる」

「なにせ誰一人死んで（ない）（おらん）」

黄巾の戦闘集団を四散させた男たちは、旅に出ようと決意したのだった。

「（破落戸退治も結構おもしろいからのお）」

「（わいはロリやない、ロリやない・・・）」

決意の中身は結構差があったらしい。

そんな決意をする二人を、そのまま行かせるほどこの世界の神も甘くなかった。

「にいちゃんとじいちゃんについてく！」

「私も兄様と御爺様についていきます！！」

数日にわたる交渉の末、折れたのは男二人。

こうして四人は世直しの旅にでることになったのだった。

武神と噂される老人が引き連れる、一騎当千の武力を誇る者たちの噂は勢い良く広がるのだった。

第四話

とある村に立ち寄ったときのこと。

横島は一人の少女が迷子になっていることに気づいた。

「・・・おかあさん」

大声で泣きたいのを我慢しているのがありありとわかる姿に感動した横島は、同じ視線になるまでしゃがんでみせる。

「どないしたんや？ 迷子か？」

こぼれそうになる涙を我慢して、少女は小さくうなづいた。

「よっしゃ、いっしょにさがそ、な？」

驚いたように目を見開いた少女は、うれしそうにほほえんだ。

「おにいちゃん、ありがとう」

そんな少女を肩車した横島は、ゆつくりと周囲を見回した。

「おじょうちゃん、お母さんってどんなかんじ？」

「えっとねえ、うんとねえ、おっぱいがおおきいの！」

「・・・そりゃ、いいことやな」

思わず球体に近い体型の女性を思い浮かべた横島だった。
なにしろ、この時代で丸まると太れると言うことは裕福と言うことだから。

「じゃ、ゆっくりとここで待ってるか？」

「うん！」

少女が寂しくないようにと、横島は覚えている童話を聞かせたり、歌を歌ったりしていたところ、いつの間にか周囲に人垣ができていた。

そんな人垣の向こうで誰かを呼ぶ女性の声。

「あ、おかあさんだ！」

「お、こっちからもよんだらええ」

「うん！」

にこやかな笑みのまま、少女は「おかーさん！」と両手を振って女性を呼ぶ。

すると割れた人垣から特徴的な女性があられた。

確かに乳がでかい。

そして髪の毛が長く、腰がくびれてる。

で、かなりの美人！！！！

くそあ・・・今、今、少女を肩車していなければ・・・

思わず流れそうになる血の涙をこらえつつ、苦笑いで横島は肩車していた少女を女性に渡した。

「も、もう、散々さがしたんだから！」
「ごめんね、おかあさん……」

親子が抱き合う姿を見て、いいものみたわーと言う感じで人垣が崩れていった。

巨乳・美人という頂点存在なのに何故飛びつかない、横島、という疑問もあるだろうが、色々と満たされて横島も成長したのだ。主に、出会ってすぐのセクハラが「ちょっと」人間関係に悪いことを、少しだけ学んだのだ。

というか、自分の父親のセクハラをみて成長したともいえる。

子供とは、親の背中をみて成長するものなのだ。

「娘が大変お世話になったみたいで、ありがとうございました」
「いやいや、こんな美少女が泣いてるんや。美女美少女の味方を自称してるわいが助けられないわけがない」

胸を張る横島をみて、女性は実に清々しいものをみる視線でみていた。

もちろん、超誤解である。

娘を助けてもらった補正でそう見えているだけだったが、この第一印象は様々な可能性を生んだ。

「……あの、よろしければ、お礼にお食事を御もてなしさせていただきますだけませんか？」

「……ええですか？　じつは大食いの連れもおるんですが……」
「結構ですよ。少なくとも、大食いの一人や二人に食いつぶされるほどの柔な倉は持っておりませんから」

女性の言葉にも、男の言葉にも嘘はなかった。

ただ、お互いの認識に差があったただけだった。

黄忠、真名：紫苑は、驚きで声をなくしていた。

彼、横島忠夫の連れである怪老人、というか喋る猿風味の老人に加えて、少女と言っていい女の子二人。

そのうち一人が、食べる食べる食べる。

もう、大の大男が見ているだけで満腹になった、といわしめ、城の厨师たちが調理しすぎて倒れるほど食べるのだ。

その量は、500人前に相当する。

あまりの光景に声がでないのは当たり前だが、娘、璃々は横島さんになついているおかげか、「すごいねえ、おいしそうにたべるねえ」と感心しているだけだった。

「黄忠さん、いわれるままに食いつくしてすみません」

「・・・はっ、いえいえ、いいんですよ？ 璃々のことをかんがえれば、この、この、このくらいは・・・」

どうにか言葉を絞り出したが、相手ののは悟らせてしまったようだった。

「すみません」

「・・・おほほほ」

まあ、それでも「腹八分目」でやめてくれた許緒ちゃんのおかげで、一月分の糧食を失うだけですんだのが曙光だっただろうか？
とはいえ、こんな大食い抱えて、どんな旅をしているんだろう、と首を傾げた黄忠。

「ああ、なんつうか、武術修行と世直し旅って感じで」

横島の言葉に、不意に思い出した言葉があった。

猿がごとき毛深い老人と、三人の弟子。

武神がごときに猛々しい老人、変幻自在の風のごとき青年、そして一騎当千の少女二人。

それは噂の人間たちにぴったりだった。

「もしや・・・」

そう思い、噂を引き合いに出すと、四人は「ああ、たぶん自分たちだ」と認めた。

だから、黄忠は反射的に誘った。

「我が城で働きませんか？」と。

第五話

まあ、何つつか、結構おもしろい。

老師のゲームの暴走で始まった古代中国っぽい世界生活は、季衣と流琉という仲間と共に旅の空に移り、そして紫苑さんという領主の元で武官＋文官というまことに怪しい仕事をするようになった。つつか、俺でもがんばってどうにかなる仕事って動なのよ、と思わなくない。

「助かるわあ、忠夫君達がきてくれてえ」

季衣や流琉は、結構兵に指示することになれていた。

これは村での戦闘訓練の影響だと思う。

加えて老師が個別に武術を教えているものだから、なんつつか、反則的に強くなってきている。

一般兵の中からも隊長クラスの实力者が結構現れていて、それを俺の部下にして指導しろという話がきたぐらいだ。

「で、この娘たちが、それっすか？」

白髪・真面目系、凧。

巨乳・技術系、真桜。

めがね・ファッション系、沙和。

・・・樂進、李典、于禁、のサンバガラスでした。
とりあえず、凧を小隊長、沙和・真桜を副長にしようとしたら、
俺を隊長にする体制でお願いしますということになった。

まあ、いいけど。

ともあれ、この三人を、将にするってのが紫苑さんから預けられ
た仕事って事らしい。

・・・つつか、いま、町の安全計画も丸投げされてね？
インフラとか、商工組合との折衝とか・・・。

だー、みんなまとめちゃえ！！

忠夫のやけっぱちは、結構当たった。
新人教育を三人に任せつつ、訓練の合間に町の巡回をさせて治安
活動。

加えて民からの相談や問題を吸い上げる相談員の代わりにしたり、
町のごろつきを検挙したりと大活躍だった。

もちろん、町の警備をしている奴ら全員が新人ではなく、まとめ
役の古参兵がいる構造にしている。

実に理にかなった手法だが、大本になる三部隊の扱いがおもしろい。

まず、楽進が纏めている楽進隊。

これは教科書通りの対応が得意で、動きも機敏だ。このまま軍に入れても問題ない奴らばかりだといえる。

次に李典隊。

李典の影響か、工作や製造にかなり向いている。

いわゆる工兵というやつだろう。

そして、于禁隊。

これが、なんというか恐ろしい仕上がりだ。

いわゆる海兵隊式の洗脳教育で、命令なら何でも聞く状態にされている。

やばいモノでも、即死級でも盲目に従うマッシーンといえるじゃろう。

なんつつ事を、と思ったが、どうやらその先があり、命令と共に何かを受け取れるようにする訓練の途中だという。

とまあ、実におもしろすぎる。

わしも一時、洗脳じゃと思ったからな。

とはいえ、この新人教育が功をそうしてか、周辺の治安は実によくなっておる。

もちろん、それを勘違いしてやってくる山賊の手合いも居ないわけではないが、それっぽい根城にきたところで戦滅しするので、結構気軽に対応できとるな。

「あの根城って、悪党ホイホイってかんじっすね、老師」

「言い得手妙じゃな」

「ホイホイってなに？ にいちゃん」

「んー？ いやなあ、置いとくと、ホイホイ入ってくなあって」

「ああ、確かにそんな感じですねえ」

とまあ、血塗れの武器を片手に話しているんじゃないから、いささか血なまぐさい世界じゃよ。

まあ、とりあえずじゃ・・・

「その小川で兵達を休ませてから戻るとするかの？」

「「「りようかい」」」

戦果を誇るのもいいのじゃが、さすがに返り血で血塗れの兵が町の中を闊歩するのはどうかと思うしのお。

「じいちゃんは璃々に嫌われたくないからねえ？」

「ふふふ、季衣、正直すぎよ？」

まあ、あのお嬢ちゃんに見せられる姿ではないと思ったことは事実じゃがな。

「・・・じゃあ、野郎どもは野営の準備、周囲警戒もワケろ。おなご衆は仮設浴場設置、忠夫に覗かれんように気をつけるんじゃないぞ」

「「「「はい」」」」

「「「「さーいえっさー」」」」

「なんでワイだけやねん!!」

まあ、ほれ、うちの隊員は覗かんしのお。

第六話

旅の空で大騒ぎも楽しかったけど、お爺さまや兄様、季衣と一緒に暮らしながら腰を落ち着ける生活も良いと感じてる。

まるで本当の家族みたいで嬉しい。

兄様は武術に優れているけど、料理も結構手広い。
蓬萊や大奉の料理なんかの異国料理をご存じだ。

今日作ってくれたのも挽き肉という処理をされた肉を使ったもので、安い肉でも美味しく食べられる工夫がされていた。

季衣なんか目を輝かせて、おいしいおいしいと繰り返す。
なんか嫉妬してしまうほどだった。

でも、確かに美味しいし、大好きな一が作ってくれた料理を楽しめるというのも嬉しい。

たぶん、季衣が私に料理を作ってほしがるのがってこういう気分なんだろうなあ、と思う。

「どや、今日の丼モノは？」

「おいしいです、兄様」

「にいちちゃん、おいしいよ！ おかわり！！」

「おにいちちゃん、璃々もおかわりい」

「あらあら、璃々も好き嫌いなくなっただわねえ」

紫苑様も璃々ちゃんも、みんな併せて家族みたい。

「隊長、自分にもおかわりを！！」

「隊長、うちにも!!」

「隊長、美味しすぎて太らせる気なお!？」

・・・なんか、最近、家族増えすぎかも。

「鈴々もおかわりなのだぁ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

だれ？

「ん？ ああ、巡回中に拾った」

「拾われたのだ!!」

「兄様、簡単に生き物を拾ってはだめです!」

「せやけどなあ、おなか減って死にそうやって聞いたら、世話したくなるやろ?」

「ぐっ、確かにそうですが・・・」

流琉は何となく不満そうに、拾ってきた女の子を見ている。

季衣ぐらいの女の子で、おなかが減って動けなくなっているというのを助けたんだけど、なんつつか、食べたなら元気になった。

「お兄ちゃん、ありがとうなのだ!!」

というか、元気いっぱいになった。

食事も終わり、落ち着いたところで少女の自己紹介。

「鈴々は、張 飛 翼徳なのだ」

「わいは、横島忠夫や」

周囲の人間と名前を交わしたところで、何で倒れていたかという話になったところ・・・。

「鈴々は、愛紗たちと一緒に義勇軍をあつめようとしてたのだ!!」

で、この村、というか町の担当が張飛だという。かなり無謀な関係だな。

「で、一緒に人たちって、名前は？」

「愛紗と桃香ねえちゃんなのだ!」

「それ、真名やろ？」

「あ、しまったのだ・・・」

おもわず顔をしかめる少女張飛は、己の連れの名前を挙げた。

「愛紗は、関 羽 雲長。桃香姉ちゃんは劉 備 玄德なのだ」

俺と老師は内心汗だくだった。
うつわー、という感じ。

もう逃げようがない、そんな感じだった。

「んじゃさ、張飛ちゃん。二人も呼んだら？」

「・・・いいのか？」

「たぶん、ぜんぜん集まってるんだろ？」

「・・・たぶん、無理なのだ」

お金もない、武器もない。

そんな状況で思いだけでは立ち上がれない、と張飛は結構現実的だった。

でも、いま、この思いを無にはしたくないと、そんな熱すぎる暴走姉妹だったわけだ。

「だからさ、紫苑さんのところで、軍の運用とか規則を学んでさ、その代わりに城で働いて恩返しして、世の中の動きや政治の動きを学んだらどうかね？」

ね？ と紫苑さんに視線を送ると、しょうがないわね、と苦笑いでうなずいた。

どうだ、と張飛をみると、すごくうれしそうにうなずいていた。

「ほんじゃ、わいが説得に行ってくるわ」

「にいちゃんいつてらっしゃーい」

「隊長、今日の当番は・・・」

「真桜、昨日かわってやっただろ？」

「・・・了解や」

第七話

私と鈴々、そして姉上が義勇軍を立ち上げることを志して一月がたとうとしていたが、いまだ同士と出会えないでいた。

姉上も鈴々も心が折れかかっていた。

そこで、二人の心の圧迫を休めようと、三人各々で募集を仕立ててみたが、やはり思わしくない。

二日目にして私の心も折れかかり、姉上のもとにきてしまった。瞬間、私は恥いることになる。

心が折れかかっていたと思っていた姉上は、普段の発言など想わせぬほど誠実に義勇軍の募集をしていた。

賢明な姉上の隣にたち、私もともに募集をしたが、やはり手応えがなかった。

「今日もだめだったね・・・」

「はい、ですが・・・」

「うん、あきらめないよ」

姉妹の絆だけは高まった。

四日目、不意に鈴々が現れた。

一人の青年を連れているところから勧誘成功かと思いきや、町で倒れていた鈴々を助けたという人だった。

心の底から感謝をしたが、彼は私たちの行いが上滑りしている事

実を指摘した。

反論はある。

しかし、それは事実だった。

「なあ、お二人さん。お二人さんは義勇軍で人を集めて、何人食わせられる？」

・・・！

考えもしなかった切り口に声がでない。

「たとえばな、この町の人たちを全員勧誘できたら、一日あたり何人分の糧食が必要だ？」

判らなかった。

「各人の武器は？ 防具は？ 寝床は？」

全く判らなかった。

「まあ、そういうことつつうのは、私塾じゃ教えてくれん。でもな、軍を立ち上げるなら知らんといかんとおもわんか？」

私と姉上は、なんの抵抗もなくうなずくしかなかった。

「てなわけで、提案や」

優しく鈴々を青年がなで、鈴々も気持ちよさそうに受け入れていた。

「張飛ちゃんの話聞いてな、うちの城主が、世直しの勉強のために客将でもええから士官せんか、っていつてるんや」

なぜか姉上が、なでられている鈴々を羨ましそうに見てる。
なぜですか、姉上。

「士官せんか？」

その言葉に、一も二もなく大賛成の鈴々と姉上。
その様子に私も苦笑いで賛成した。

「鈴々の真名は「鈴々」なのだ！ おにいちゃん！！」

「私は、劉備玄德、桃香だよ」

「わたしは、関羽雲長、愛紗」

「わいは、横島忠夫。真名はないんや。横島とでも忠夫とでも好きに呼んでな」

「うん、おにいちゃん！」

「はい、忠夫さん」

「わかりました、忠夫殿」

こうして、私たち姉妹は、黄忠殿に仕官し、そのちからを伸ばすことになったのだった。

「うむ、愛紗よ。いい筋じゃな」

「ありがとうございます、老師」

「鈴々、もっと頭の中を空っぽにするんじゃない」

「うにゃ、考えがなさ過ぎって言われたことはあるのに、もっと考えるなって言われたのは初めてなのだ」

老師による指南で、愛紗も鈴々も大きく力を伸ばしていた。

愛紗は考える「動」タイプで、鈴々はリミッター全開ではずしての「動」タイプ。

自ずと指導の仕方が違うそうだ。

さすが武神ってとこだな。

「・・・それでも、忠夫殿には当たらないのです、老師」

「鈴々も力不足を感じるのだ」

「なに、あいつにはワシですら不意打ちじゃなければ当てづらいぞ？」

おお、と鍛錬場が盛り上がる。

一般兵も将も、武に関しては同じ地平と言うことで、合同演習しているため、どれだけ将が抜きんでいるかを知っている兵たちは、それでも当てられないという状況に驚いているらしい。

でもなあ・・・

「当たったら痛いやろ？」

「あたりまえなのだ」

思わず笑う鈴々。

「にいさまー、そろそろお昼の時間ですよー」

「忠夫さーん、兵のみなさんの分も出来ましたー」

「おー、今いくぞー」

返事をしてから振り返る。

「おーっし、午前の武練終了！ 午後からは各隊から警備・巡視・巡回に分かれて仕事だぞお」

「「「「「了解！」「」「」「」

そんなこんなの中やけど、世界は刻一刻と陰を広げている。歴史的に、地域治安的に判っている俺たちは、着々と準備を進めていた。

第八話

史実とは色々と違っていた。

何しろ蜀の三兄弟が三姉妹。

有名武将の大半が美女・美少女。

で、武力はスゴイ。

もちろん、老師や神族を越えるような化け物じゃないけど、一般人を遙かに越える。

そんな人間が鍛えた兵を率いて、賊を追うというのだから一方的になる。

もちろん、そのへんで慢心がちになる兵をシメるのも将の役目なので、色々と苦心しているようだった。

ほめれば慢心するし、攻めれば萎縮する。

この辺のさじ加減がうまいのがサンバガラス。下手なのが愛紗。

とりあえず、委員長体質なので、俺の副官についてもらっている。

意外に隊を一番うまくまとめているのが鈴々。

季衣や流琉よりも纏まっているのがスゴイ。

「お兄ちゃん、ほめてほめて〜」

「「「「ほわぁ・・・癒されるう」「」「」」」

なんか向いてる方向が変じゃねえか？

「にいちちゃん、ぼくもほめてよー！」

「「「「許緒將軍、もえるう」「」「」」」

「にいさま、試食をお願いします」

「「「「俺も食べさせてもらいてえ」「」「」」」

著しくだめな方向だな、うん。

「ただおちゃくせん、あそんでえくく」

「くくく」璃々姫様もえーーーーー！」「くくく」

てめーら、一度死地に送っちゃる。

てなことが、賊退治の寸前まで維持されるんだから、士気が高いんだかひくいんだか。

「隊長お？　ちよつとええか？」

「真桜か、なんや？」

「対攻城兵器開発予算なんやけどな・・・」

「真桜、その件はすんでおろう？」

「愛紗、昨日と今日では話が違うんや、画期的なカラクリなんや！
！」

「関係ない！　民草に回さねばならぬ予算から避けるはずも無かる
う！」

「城を守れば民も守れるちゅうこっちゃ！」

ぎゃんぎゃんと意見交換があるが、これは結構勉強になるらしく、
俺の隣で桃香が竹織に細かな書き込みをしていた。

「んー、はじめの予算配分って大切なんだねえ」

「まあ、後からひっくり返ると困る予算は固定するけどな。せやけど、食い扶持減らしてもださなならん金もあるんや」

「んー、政治って難しいんだねえ」

「ま、政治も武術も何でもかんでも『虚実』があるもんや。砂上の楼閣のような虚でも、それが無くちゃ役に立たんし、いかに名前という虚があつても『金』つつ実が無くちゃ意味がない」

「・・・きよ、極論だね、忠夫さん」

「んー、正義無き力は暴力やけど、力無き正義はゴミやからなあ」

瞬間、視線が俺に集中した。

議論も論戦もなしにだ。

「忠夫殿、それは、その、力を持つて正義に当たるとの宣言ですかな？」

「た、隊長お、旗揚げ宣言？」

「そ、その、忠夫さんが立つなら、協力させてほしいかなあ・・・？」

その台詞を聞いて思わず苦笑い。

「あー、正義を語るにや、俺は汚れてるんや。せやから、周りの人たちの幸せ程度が守ればええんやけどな」

「そ、そんなことはありません、忠夫殿は民にも官吏にも愛されている、そして我ら武官の信任も厚い！」

「せやせや！ 隊長ほどうええ人が民を率いるなら、みんな安心やでえ！？」

「そうだよ、忠夫さん！ 忠夫さんなら、忠夫さんなら、優しく厳しい王様になってくれるって・・・」

ぎゅっと顔を近づけてきた三人を押し戻して深呼吸。

あー、やばかった。

潤んだ瞳と上気した顔、そして巨乳三連星、六連星ってどんだけワイの精神力を試してるんや！？ このまま暴走したるかど、本気でこれそうやったわ！

あー、ステイステイ。

「・・・あんなあ、いま、黄忠様の家臣の身でそんな怖いこと考えるかつちゅうの」

「「「あ・・・」」」

思わず視線を合わせあう三人。

「とりあえずは、部屋の外で待ってる璃々ちゃんと遊ぶのが先決だな」

「「「え？」」」

振り向いた先には、戸を少しだけ開けてのぞき込む璃々ちゃん。

「忠夫ちゃん、あそんでくれるの？」

「おお、ええで」

につこりほほえむと、うれしそうにほほえんで駆け寄る少女。高い高いをしつつ肩車。

「ほれ、お姉ちゃんたちより背が高くなった」

「わーい！ 忠夫ちゃん、背が高いからすきい！」

きゅつと俺の頭を抱きしめる璃々ちゃん。

「ね、忠夫ちゃん」

「ん？なんや？」

「忠夫ちゃんもいつかででっちゃうの？」

「んー？ 紫苑さんに嫌われたら出てくしか無いかもしれんなあ」

「お母さんには絶対に璃々が言うから、出てけっていわれてもでてかないでね？」

「・・・うん、わかったで、璃々ちゃん」

俺が教えたゲンマンで約束。

ま、この子も眼前の三人レベルになることは決まっている「約束された勝利の胸」やし、まあええか。

巡視隊が押さえた情報で、黄巾本体が、この町をねらっていることがわかった。

一応、城があり、壁があり、それなりに栄えていて兵力が少ないという理由らしい。

「ふ、ふふふふ、我らの町をねらうだと？笑止」と愛紗。

「ははは、兵力が少ない？ 一騎当百の兵と一騎当千の将の私たちが？」 狂気の笑みの風。

委員長二人組がこの狂気なものだから、周囲は怯える怯える。

「これ」

「きゃん」

老師の拳で我に返った二人だったが、周囲は怯えたままだった。

「で追加情報は？」

「にいちちゃん、流琉が・・・」

「もどりました！」

グッドタイミング、と撫でつつ情報収集。
情報こそが戦いの本質なのですよ、ええ。

「とりあえず、いつ頃くるか、兵力はどのぐらいか、教えてちょうだい」

「はい、紫苑様」

第九話

工作隊の作業は、黄巾本体到着二日前に終わった。

というか、情報通りに罠を仕掛けたんだが、本当に上手くいくのだろうか、と疑問を会議で発言すると、忠夫殿がニヤニヤわらい。

「まあ、上手くいけば儲けもの程度に考えてりゃいい」

とはいえ、上手くいかないなんて考えていない顔だった。

「おにいちゃん、人の悪い顔をしてるのだ」

「んー、でもああ言う顔をしてるときって、忠夫さん絶好調だよなえ」

姉上と鈴々の感想はおいておき、会議で初めて引つ張り出された黒板（真桜発明）に、白墨（真桜発明）で罠と作戦概要がかかれ始めた。

正直、ここまで執拗にしなくてもいいじゃないかというほど罠が仕掛けられている上に、いやらしい仕掛けでいっぱいだった。

なんというか黄巾の奴らに同情できる様子に思える。

なにしろ、罠におびえて引き返したときに初めて発動する罠って、どれだけ意地の悪い話なんですか？

まあ、我々が武を示すよりも、民の命の方が大切であるという考えも理解できるので、それはいいのだが、どうも、こう、なんとい

うか卑怯討ちのようで、気分がよろしくない。

「まあ、城攻めで上から矢を射るのと変わらん」

老師、そのひとまとめは乱暴かと？

とはいえ、少数の不満はあるが、それなりに支持された今回の作戦は、罠に落ちた賊の処理と逃げることに成功した賊の処理に照準が合わさったといってもいい。

というか、すでに罠が上手くいくものとして動いているが、本当にいいのだろうか？

そんな風に思っていたときもありました。

騎兵の大半が落とし穴にはまったり、馬用の足取り罠にはまったり、怯えたところで弓兵のねらい打ちになったり、逃げようとした賊が転倒したところでそれが連なり、百人規模の転倒になったり、落とし穴に落ちたり。

正直に言いましょう、信じられない。

でも目の前の光景が信じざる得ないものだと言っている。

「よっしゃ、愛紗。背後部隊に襲撃命令」
「はっ！」

色狼煙（真桜発明）で合図を送ると、浅掘した待機穴から千人の歩兵が躍り出る。

鈴々、季衣、流琉の右翼と、真桜、沙和、凧の右翼。
そして、

「愛紗、正面任せる」
「お任せください！」

正面門まで降り立った私は、部隊に声をかける。

「忠夫隊、これより愚かにも我らの町を襲おうと考えた阿呆に、死の鉄槌を下す」

「「「「「おお！」「」「」「」

「各、思うところはあるだろう。しかし、これも我らの町を守る為の闘争。一切の妥協は必要ない！　すべてを刈り取れ！！」

「「「「「おおおおおお！！」「」「」「」

「隊、前進！！」

我が騎馬とともに、我らの隊は賊に襲いかかった。

「逃げる賊は卑怯ものだ切り捨てろ、逃げない賊は訓練された賊だ切り捨てろ、穴にはまった賊は阿呆だ切り捨てろ、賊はすべて切り捨てろ！！」

「 「 「 「 「 おおおおお！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ 「 「 「 「 「

うむ、この手の鼓舞は忠夫殿に教わったが、効くな、うん。

第十話

愛紗ちゃん、ノリノリね。

思わず城壁から弓兵を指揮しながら感心しちゃったわ。

愛紗ちゃんの部隊が通った後は、血河が出来るような勢いでものね。

戦意の引き出しも上手に行ってるから、この戦闘が終わるまで持つでしょうし、ずいぶんと助かつちゃうわ。

でも、穴にハマっただけや転んだだけの賊が回復し始めてるわね。

「つつわけで、色狼煙第二段よろしくお願いします」

「わかったわ、忠夫君」

私の指示で、火矢が城壁の先端にある火口にあたり、別の色狼煙があがった。

これにより作戦は終局に向かう。

使用が控えられていた大鉄球やらの大型武器が使用され、加速的な戦滅が起きるだろう。

そしてそれは城壁の上に招かれた領民たちに公開され、その強さを印象つける。

間者もいるだろうが、それは関係ない。

逆にこの作戦を実行し、遂行できる力があると思われた方が以後の行動を予想しやすい。

ともあれ、これ以上の作戦や検討となると一領主だけではこなすきれない。

そろそろ優秀な軍師が欲しいところね。

後に「風雲黄忠城」と呼ばれるようになる野戦傭群の一号始動は成功に終わった。

とはいえ、最終的な武力投入がなかったことが彼らにとっての幸せだろう。

万人を越える賊軍を打ち破った町として、この町に多くの商人や人々が集まるようになりました。

兄様発案の罾作戦は、実のところ城壁以上の効果を示していて、周辺の賊がいつぱんに減ったぐらいです。

やはり皆殺しというのは大きな効果だったみたいです。

加えて、賊は肉片すら残さないという苛烈な方針で「焼き払い」、骨まで砕かれてしまいました。

これが町の犯罪者に対する方針であると認識されたせいか、破落

戸さえも滅つたんですけどね。

御爺様は「まさに一罰百戒じゃな」と仰ってましたが、一罰どころではありませんね。

でも、兄様が考えていたことはもつと別のことで、死体がそのまま土に埋まつていると陰気がたまるので、生きている人に良い影響ではないと教えてくれました。

つまり、大量の土葬はよくない、ということらしいです。

そんな考えを広めるわけでもなく、兄様は賊退治を進め、町の平和を広めて行っています。

個々の武力は無敵。

軍力の武力は無双。

百を薙払い、千を押しつぶし、万を下すと言われた風雲黄忠城。

大守に望まれた彼女の元には多くの武將がいるが、軍師の層は薄いらしい。

そこで、私たちはやってきた。

本当は曹操殿の元に、と思っていたのだが、風が強行に「黄忠」というか「罨使い」の元に行くと言い始めたため、私も興味があったので一度は見に行こうという話になった。

まず、城までに至る道で驚いたのが未だ門が遠いのに、入る人、

出てゆく人の列が長々と見えたこと。

そしてその列に加わってさらに驚いたのが、入場鑑札という制度だった。

城の中の住民以外は必ず受けることになっており、簡単な特徴と目的などを受付で控えている。

租税や賄賂などは求められず、一応、商人は別途の租税が必要になる程度の話らしい。

「稟ちゃん」

「ええ、わかってます」

この方式はすばらしい、と解ってしまった。

町に入る前からこのような興味をわきたてる政策を見せられては、風の意見が無にできない。

「大守に会えるよう、何らかの手を打ちますか？」

「そうですね、正直、見極めのために仕官するのもありだと今は思っています」

そんな私たちが入場してみたのは、文官採用募集の立て看板だった。

「これです（ですね）」

これは幸先が良い！

第十一話

隊長曰く、「優秀な文官ホイホイ」という立て看板をみてやってきた人たちの記帳をまとめて、老師の部屋に持っていったら、隊長と老師が茶を吹いて噎せつたの。

「げふげふげふ」

しばらく落ち着くまで待っていたのだけれど、ボソボソと老師と隊長が内緒話。

「……程立に郭嘉、楽進・李典・于禁、典韋・許緒……」
「……曹操涙目じゃな」

程立と郭嘉は、たしか今日の文官入試に名前があつたの。

「それにしても、諸葛亮と鳳統とは……」
「集まりすぎつすね」

「隊長、なにか間違いあつたの？」
「いやいやいや」

なぜか老師と隊長はあせつたように首をヨコに振る。
とつてもあせつてるの。
これは何か秘密があるの。

この秘密を白日の下にさらせば、何か言い事があるに違いないの！

「おしえるの……！！！！」
「だー！ おっぱい押し付けるなあ！」

「教えるならやめるのお!!」

「くう、離されんと地獄が待ってるはずなのに、この魅力には逆らえん!!」

「ふっふっふ、隊長、観念するのなの!」

さすが天下の女好き、真桜に及ばないこの胸でも誘惑可能とは、隊長は恐ろしい人なの!

なんつつか、有名武将とか軍師が山ほどやってくる黄忠城です。

三国志知識があると、気でも違うんじゃないかと思わされてしまふ。

これだけの人間を抱えてると、人件費だけでもすごいことになりそうなもんだけど、チート軍師たちがホイホイ片づけてしまふせいで、信じられないほど低い税率+高効率の運用が出来ている。

「忠夫様、お話を聞かせてくだしやいませ・・・ってかんじやった」

「わ、わ、わたしゅも・・・!!　　ってかみまくり」

「お兄さん、風にも聞かせてほしいのですよ」

と、ロリ軍師隊が、なぜか政務の合間に集まって、いろいろと話をする機会が多い。

これに季衣やら流琉、鈴々も加わると盛り上がり、璃々ちゃんも加わると大家族になってしまう。

・・・つつかよお、なんで顔もスタイルも

抜群のお姉さん方が多いのに、俺の周りにロリしか来んのかねえ？
俺の膝の上を順番で占領するって、なんのルールですかぁー？

まあいいけど。

「隊長、そろそろ巡視の時間なの〜！」

「お、了解〜」

そんなわけで、そろそろ解散。

「「「「「ぶ〜〜」」」」」

不満そうなロリツコたちを、一人一人引きはがしているところであることに気づいた。

一人多くね？

「あ、鈴々が拾ってきたのだ！」

パンダのアクセサリー付きの帽子をかぶった少女が、ガツガツとお茶受けを踊りぐい。

その隣でピレネーっぽい大きな犬も一緒に食べてる。

「おー、そうかそうか、鈴々偉かったな」

「お兄ちゃん、これも将のお役目なのだ」

につこり微笑む鈴々を撫でつつ、少女の目線に合わせてしゃがんだ。

「おなか減ってるのか？」

こくこくとうなずく少女と犬。

「よし、巡視は誰かに変わってくれ、沙和！」

「もう、隊長」

「今度おごるから、な？」

「・・・む、了解なの」

というわけで、なぜかロリッ子軍団がそのまま食堂まで移動してきた。

むー、鈴々と季衣が来るってことは、そのまま知らない女を単純に餌付けするわけじゃないよな？ 私らにも食わすよな？ という圧力かいな。

横島さんが、また幼女を囲ってる。

そんな噂を聞いて厨房にきてみれば、城内の小柄女子が全員集まっているかの様子だった。

もしかして、幼女踊り喰い？

「り、鈴々ちゃん。これ、何の集まり？」

「桃香ねえちゃん、おにいちゃんがごちそうしてくれるのだ！」
「？」

詳しく聞くと、行き倒れの女の子を鈴々ちゃんが拾ってきたので、忠夫さんがその世話をしているという話だった。

そういえば、鈴々ちゃんを拾ったのも横島さんだって聞いたつけ。そのあとで、私たちも拾ってくれたんだけど。

「・・・ぶはあ！　とってもおいしかったですぞ！！」「わふわふ
！」

熊猫の飾りをつけた帽子をかぶった女の子が、輝く笑顔で横島さんにお礼をする。

「なになに、ええって。おなか空いてたら良いことないしな」

優しくなでられた女の子と大きな犬は、とても気持ちよさそうにしている。

「あ、あの、私に恩返しをさせてほしいのです！」「わふわふ！」

ふつつだったらここで断る横島さん。

でも、女の子の名前を聞いた途端、両膝をついてしまいました。

「・・・なにか変な名前でしたか？」

「い、いや、かわいい名前だと思うぜ、陳宮ちゃん」

「・・・ねねね、いえ、ねねと呼んでほしいのです」

いきなり真名交換です!!

やっぱり横島さんは幼女ねらいの幼女狩り人？

「聞こえの悪いこと言うなや!!」

「「「「ええええええええ?」」」」

「おまえらものっかるなや!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498z/>

GS 恋姫無双

2011年12月27日02時07分発行